

第82回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十二年十一月二十五日(土)
場所 千代田校舎三〇六教室

講演

中国文明の遺産

学習院大学文学部教授 鶴間和幸先生

研究発表

《国文学》

『源氏物語』二様の琴について

研究生 和田克子

『源氏物語』の豊富な音楽表現の中でも、琴(又はきむ)と表される七弦琴は、「須磨」「明石」及び「若菜」巻において重要な意味を持つ。そして「須磨」「明石」における琴と「若菜」巻における琴とは大きく異なる性格を以て描かれているのである。それは、前者が源氏一人の弾く琴を中心とし、後者が琴を交えた複数の管弦の場を描くその相違にも表された。

然し、重要な点は、琴が凡そ三十一絃の距離までしかその音が届

かない程かすかな音量の楽器であることであり、琴の持つその本質を踏まえると、物語の中にこめられた作者の意図が次第に明らかになる。「須磨」「明石」巻において、琴はどこまでも響き伝わる奇跡を伴っており、「若菜」巻に描かれたことはかすかな音量である楽器そのものとして現実の中に位置付けられている。

それらを考慮して、作者が何故二様の琴を書いたのかを究明するために、前述の巻のみには止まらず、又、和琴にも関連させて考察した。史実の流れの中での楽の変容をたどりつつ、この度は琴を始めとする雅楽の楽器の音量を実際の楽器から収録するところから始めた。楽の表現に作者の感覚と理性が綾なす見事さをも解明する。

太宰治「たづねびと」論

博士後期課程 二年 西田元久

「たづねびと」(『東北文学』昭21・11)には「私」の矜持の喪失が描かれている。ここでいう「私」の矜持とは、たとえ戦禍にあって乞食文士たろうとも、他人の無償の行為には拒否の態度を示すというものだった。しかしそうした外見とは裏腹な底意を見透かしたかのような若い女性の施しが「私」の矜持を傷つける。そのことが天